

三々
熟
誌

不
定
日
月
記

誌

۱۰

不^レ可^レ成^ル九月十日
修^レ後^ノ時^ニも^ハ勢^ノ衰^ミ廢^ス人^々於^テ是^ニ遂^ニ經^ス
傳^ノの^キ油^ヲ井^ノ入^リを^シ神^ノ辟^ス儀^ヲは^シぬ^カ
言^フた^ラし^テ説^ク直^ニ候^ヘを^モは^シふ^カ乃^チ
中^ノ卒^ス到^リ者^ハあ^リと^モあり^タり。

九月

全

[illegible]

月

正人

طبر

1

本

白

度

[illegible]

(Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side)

[illegible][illegible]

十月廿七日 月
山中方面一泊行

全有士口全
以辰分社入生

全 十有七
乃 井に米井のこ 鶴米の遠見

たゞこれに昔昔の事を書き記すに
たゞこれに昔昔の事を書き記すに
あつた事を書き記すに
あつた事を書き記すに
あつた事を書き記すに
あつた事を書き記すに
あつた事を書き記すに
あつた事を書き記すに
あつた事を書き記すに
あつた事を書き記すに

十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一

十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一

十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一

十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一

十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一

十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一
十一

何んぞは来予く近海は越く之故のはとい
何んぞは来予く近海は越く之故のはとい

四月十五日

[illegible]

十二

[illegible]

合 國 大 会

以後の念日
 或は石路山麓、恒好井の之に
 至る、方ある遠き、専ら芝草陰の下楊梅
 木あり老人も亦ち之の屋敷をゆく、
 爾日全老を塾友に執苦す、
 夫す、今人の式は

乃西乃の殿ニ
城ヲ守ル所ナ
シ合ハテ大ノ

陸奥の風土記 大杉守吉

合 田川に在る。大杉守吉の

合 田川に在る。大杉守吉の

合 田川に在る。大杉守吉の

合 田川に在る。大杉守吉の

合 田川に在る。大杉守吉の

合 田川に在る。大杉守吉の

合 田川に在る。大杉守吉の

合 田川に在る。大杉守吉の

合 田川に在る。大杉守吉の

合 田川に在る。大杉守吉の

合 田川に在る。大杉守吉の

合 田川に在る。大杉守吉の

合 田川に在る。大杉守吉の

合 田川に在る。大杉守吉の

今日月太
短。短。短。
少。少。少。
休。休。休。

先を放つて居た。ヤカおね、腹より一思い
 ちり海を渡ると山越も一筋にぬけた。
 はかい、るるどるるを貫つて、うき屋とてはつと
 けり。おねとよきおね、おねとよきおね、
 ぬこした。

[illegible]

3	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

+

此の夜は雪が附近の大木の下に落ちた。

合

朝乞ひ、瑞國と并へば、毒井と云ふ、東有
の志を先づ来訪す。此入塾の人々は是れより
存心念切なる。

千はまのけしきの中へいりて
 いた。あまのうしろのうしろ
 解んとていりていりていりて
 一止まのうしろのうしろのうしろ
 大のうしろのうしろのうしろ

是右に於て生るの海作の罪よりんあるをた

式に玉に執るべきを一同にせしむるは
 の事なり。今よりその事を知るは
 一部五部又
 一部丁部
 二部甲部
 二部乙部
 今よりその事を記念するは
 右長二部
 右大に之を方部と稱す。
 大に之を方部と稱す。
 永年を記。

太子

隔離之水たる過去は生命ではな

驚嘆するやうである

切刺郎的現在の歡樂に酔ふ時私たちは
現在に生きゐるものでありに多く過去を生け
る屍が浮き上つて来る 私たちの懐疑と

痛悔と屈辱がありと生きて来る

願て誇りかゝる事のおきにしもあらざりて
あまかそれうは屍の生けるものとしてあまりに

拙弱ではあるまいか

塾 四ヶ月 否七年の生活は終つた

一時的である事より各個人の胸に波きつて
の他として私などの塾生活としてたのしかつた
が悲慮で入相の鐘をきいた病魔に
静養はれし人々、身丹の人たちに形制的永久の
別離に遭遇せし人たち、こうした境遇
に置かれた塾生あまり有形上に於ては
元来かき交す事なく終つた。
同志を、いかう悲し生ける屍を、
八年を迎ふる為めのよりよきより富
かふるため悦と生半のために揺る水
たる極を
塾としてかゝるに改革があら

特筆すべきは「塾生食糧問題」である
自ら其の意向を主とする制に決せられ
自らか直接に生活に形而上的に接する制
は設けられたのである
破れ壊れするもの死せるものを、つくせ
としこの心はよりよく新しきものを、建設
のために汗あり涙ふけおぼしうぬ
雪ありて凡肌を剥ぎく（あんまりふきす
ゐた言ふが、冬は寒た、雪も雪、
ふき、北風の野に雪々淋しくし希望
と意義ある生活のために再びこの塾生
に期すを、

八日 余暇に天休余暇をする事あるから
余暇にまたこれに今より内はよからう
十三日 原氏帰省あり元々氣のふいふには
驚ろつた凡の神が凡れをいふに海を
だけばと思ふに今こゝまでとは思ふもあ
つた本根氏も今度は何やら
健在なれ健在なれ

世目 決算職務怠慢のため塾長園へ
あり叱られたるあり何人じやの、

二月

四日 雲揚き、福は丹いぢやて思ふ
ちでまを食つたしルツのコン。かありた
修つて一月本根氏にさあもまをす
上あさる友塾生の奴が三人集こらん月を
取た散々まかされに行つた

六日 本根君の針電夜来る

驚駭甚しき悼念を八日の午後

四時よりとま

八日 四時より本根君の法會本村
先生と一同 故人の部屋に集りてふ
す夜の明りはローソクにして種々

木根氏生家の事を偶か午未一時
聞かす。

十日 木根氏の義兄末訪

諸を故人の臨終の事ゆゑを告ぐ

木根先生を岡本先生へ中野君

屋敷内とありて訪問する

十一日の午未一時に帰省柳の屋

に上る、由 木根氏のせぬは

運送屋に依頼とてちく済送

せり

十六日 石井君病の爲め西の

村宅に入る

廿日 午後六時半より北に塾

に入る人々のために肉のこぼれを聞く

入塾者名たのむ

英法三月 とも田君

全二回 高田君

夜更りして木村先生をきき、食後

湯を浴び、塾生達の事をきき、教

諭、文を多読、塾生あり

これより先、北に塾生にきき、今日

の塾生の時より、塾生にきき、今日

の塾生の時より、塾生にきき、今日

の塾生の時より、塾生にきき、今日

の塾生の時より、塾生にきき、今日

四月二日

五木氏は三月の末日に就き一箇の室に遷り
昨一月は元里高坂二氏、木村先生(教士)
と令弟と共に、木村孝清に出掛けた
今般又々中野氏和(若行々、古奥田原は今
般は故里にお国さへお礼に、市井り附との
るかしらし、半終止まつたが、此れ附氏である
丁亥今般もこうする所を、午未十二時に目
をすして、飯に召し終るものと、就きの先附
杉本を其田の耳お兄とら北に、その日はあつち
こつち散々した、一葉田園に事は、春附の婦
の心を操り要ある

四月三日

杉本氏午前九時去海

四月四日

高坂石黒、兩氏帰、いふふ、あふ風貌
と云ふ、意、事、言、ひ、程、局、の、備、に、似、て、る。

四月五日

及方石黒氏歸来

四月六日

中野氏かへる

四月七日

高田氏、かへる、元里高坂二氏、一、時、多、かへる

冒合

坊言期開始

四月九日

澤尻澤塾

昨夜より石井君若菜君より、お寺より地保長

と思ひていふ

四月十八日

南校北高良校長倉澤のたの校長上京

中書以て浦井郡校校長の祝辭をよむ

合則がかりなり

五井君の病女様、相違ありと昔に浦塾

昨夜、四下、なまじたるを百鬼あやしい

九月三日

秋の光景、高倉氏来る

夕會と若に在

日本橋合はて、四日にあうキリスと教はる

帝説をやりかた

十月五日

鎌倉元者部氏来談

松七郎より、本村、高倉、西の三君と

絶望氏、一合、談話にていふ

蘇王、秋まふ

橋本戸(ラニニ)おしとわんせ(人)

有馬(おし)二人、北條、人に訪う

33年

おきまを引とていけりゆかといふ

北信武 酒田 辰 西元生に今の人 四選

前二人の外 女爲の外 垣 二の 雄坂 哥八光

佳り 小生 殆ど 永 言に 静を つく

の 三 年 梓の 木 角に 好り 二に 鉄 整 一 生 清

南 陸 34 年 一 西 日 七 元 生 の 終 言 に あり 二 三 年

整と 三々 終とを 女に 池田 町 毛 外 年

一 龍 武 大 光

大 龍 武 大 光

二 六 龍 武 大 光

大 龍 武 大 光

大 龍 武 大 光

大 龍 武 大 光

昭和三年四月

林 秀夫 文三丙

天 俊久 雄 文三乙

二 木 泰雄 文三甲

新 野上 新平 文三乙

川島 熊夫 文三乙

井上 忠保 文三乙

小 曾 理三丙

井 関 理三丙

おぼさん

新 安村

帰ったのを僕等の自炊生大は感
矢夜はつばかり大きくてやることは
三つ見だニホは炭をふニホに薪を二ホ
「かつたそて作った山からは大木をたいた山を井
や井炭はサホモばかりだ

九月二日 ストロベリーコンパ

青糸(日月) 秋ニホ矢夜井上と白山登りや
この日午ふ七外金澤白山行発論系から
白山登り自炊生大は感中
すてに秋風。初谷にそて登り雪の

上にテントも張る

二十九日 昨日白山頂と思ひしは未だみだば原に
に元所き一同じき高りて露落地
出発して十三時十五分前山頂に到る
北風の重なる亦願望して指すの
つらなる井上は指を毒におかき小歌を
室堂附近にあり。帰途は旧道を辿り
に道至いやくく或は山石山のつらなるあり
或は木つ根に絶て下るあり或は急
雪溪の谷にのぞんである苦心考
且一行は病人あり。

温泉の上十余軒あり。所高き森をくむに

氣づきとうにかゝる矢浪は林と血泉にまち二示
りきたるでた手一面は小井上と小て宮岸
に急行せし土地の匠者は丹毒と診断
すよて二名は午の三時より自他車を
翻つて十数里の山道を金澤に其け
午の三時金澤着

青三日 二天井上と小て宮田進院に至る

井上の病あつく直ちに同病院に入院

矢浪一人のみをて帰る林の身業せし

は川島三木左坂署に保護願をもち

午右ササ二木の部屋にどうとたれふもの
あり身に幾ヶ所の擦傷とあが衣類は

みるもあけ小にほころびたり膝は露しその痛
には血ににやり一光のあふな

ありコアと名をせて勤く元氣回復するに

彼の目く昨夜土時に右目に足とるが人事

不省とていじ彼の體心はほむべきか

テントを右目に自らけりて冷気とせき蹴るに

て飯をのぎ全身の力をかたむけてその右腕を

温泉湯まをとりとは

六月日 林はその後事を小井上井上の病をた

罵く舌更に甚く喜は右腕一面は及べ

二天林 友の病室を知りてく花と絵と

もちて病院にやゝに熱高くなりて共
なり。ドアには~~書~~而会海池の貼紙
あり。こよまなり。

六月日金 才良校静勝館取にて岡部上
田の所張勢相政平仲に與する由頂の
發表と目録刀割の不法を斥じ。林
浅長と有り。野上川島矢他は亦喋る。

六月廿月林 野上川島無期停學。矢良退
費となり。紙外並取一入水心氣起り。
解散か? 持戻か?





